

論文の和文要旨

論文題目 モンゴル馬の毛色の研究

—モンゴル馬事文化研究序説—

氏名 が ん ぶ へ
剛 布 和

「モリタイ（馬がある、馬に乗っている）」と言うと、「幸運である」という意味になり、「モリグイ（馬がない、馬に乗っていない）」と言えば逆に「不幸」という意味をあらわす。このことからモンゴル人にとって馬の存在はどれだけ重要である事かわかる。

これだけ馬はモンゴル人の生活に結びつき、人の幸福、更に生命にもかかわる大事な存在であり、現在もありつづけている。

これにもかかわらず、モンゴル馬事文化研究はモンゴル研究の中であるべき重要な位置におかれていない。それほど重視されていないのが現状である。過去の研究者達によりモンゴル馬事文化は部分的に研究されて来たがモンゴル馬事文化という大きな体系としての研究はほとんどなく、多くはまだ資料の収集、評価情報提供の段階にとどまっている。

今までの研究ではモンゴル馬事文化においてウング（色）ズスム（毛色）ネレードル（命名）シンジ（特徴）などを混同してしまっていたのを見直し、ズスムとはモンゴル人の馬についての認識の過程において極めて重要である事を論じた。その上、「元朝秘史」にあらわれるズスムを比較分析し過去の学者達の意見をまとめ自分の意見を述べて、カラー写真資料を使いながら解釈した。モンゴル口承文芸、特に英雄叙事詩に駿馬は頻繁に登場する。モンゴルの広い地域の叙事詩をあつめその中に出現する馬のズスムを統計分析し英雄叙事詩の主人公が英雄あるいはマングスである事によって騎乗する馬のズスムが違って英雄の場合はモンゴル人の好むシャラガ・ズスムの馬に乗る傾向がある事を指摘した。

具体的に各章の内容は次のようになる。まず序章ではモンゴル馬事文化を、モンゴル民族の形成史、馬という動物の進化過程におけるモンゴル馬の位置、モンゴル民族とモンゴル馬の分布の観点から述べた。

第一章ではモンゴル馬事文化についての先行研究を日本における研究、モンゴルにおける研究、内モンゴルにおける研究という三節に分けて代表的な研究者と研究成果について論じた。

第二章ではモンゴル人とモンゴル馬の関係において最も根本的な事である騎乗、馬具と馬乳酒について論じた。馬具文化の中では①捕らえる道具と固定する道具、②騎乗用の道具、③生産や祭りなどに使う道具、など三項目に分けて述べ、「元朝秘史」などの文献で馬車についての記録がなかった事と、馬車についての各部の名称が漢語からの外来語が多い事、及び馬事文化そのものから見て遊牧民にとって騎乗の意味からモンゴル人は牛やラクダに車を引かせる伝統があったが馬に引かせる歴史はそう長くなかったという見解を述べた。

第三章ではモンゴル馬の焼印と馬の見分けについてのソドルについて論じた。

焼印についてはその概念、性質、種類、意味などについて20世紀初期から内蒙古、ハルハ、オイラド等の地域で使われていた焼印を資料として研究し、焼印は道具である、焼印は印である、焼印は証明である、焼印はシンボルである、という風に四つの方面からまとめた。更にモンゴル国調査中発見したタマガと過去の収集に入っていなかったタマガについても紹介し、文化人類学、歴史学、芸術の面と記号論など各方面からアプローチする可能性について述べた。馬の見分けと調教についての研究という部分ではソドルの種類、ソドルの題目及びその特徴、ソドルの書かれた時代という三つの方面からモンゴル馬の調教に関する体系的な理論体系はモンゴル馬事文化の最盛期と思われる十三世紀に形成していたという意見を述べた。

これらの事をふまえて本論ではモンゴル馬のズスムというモンゴル人の馬に対するの認識において極めて重要で独特な文化について論じた。

まずはズスム研究の重要性、意義について述べ、過去の研究者によるウンゲとズスム、ネレードル、シンジなどの概念を混同していた事を見直した。ズスムはモンゴル人の馬に対する認識において年齢と性別によるよび方とならんで、識別法を構成するものの中で最も重要な要素であり、モンゴル人の馬を識別する為の科学的な方法であると位置付けた。

これをウンゲ、シンジ、ネレードルなどと比較しながら論じた。又古典にあらわれるズスムという部分では「元朝秘史」にあらわれた馬のズスムを分析した、三種類の注訳本を対照しながら自分の意見を述べた。

この研究によって以下の事が明らかになった。

第一、過去の研究ではウンゲとズスムを混同してしまっていた。本研究によってズスムとはそれを表す言葉、変化過程、モンゴル人のウンゲに対する認識の事例の分析からモンゴル人にとってのズスムは“色”というより人間の顔だちなどをあらわす“ズスム”という語に近い。従って“ウンゲ”と“ズスム”はまったく違った概念である事を提示した。

第二、今までの研究ではズスムはネレードル（命名）の一種の様に解説して来たが本研究ではズ

ズムは多くの場合、毛色の名前であり、馬そのものの個体をあらわす名前ではないという事を提示した。

第三、遊牧民の歴史から見てモンゴル人の馬に対する認識は最初は馬を食として利用し馬は人にとって狩猟の対象であり、肉のかたまりにしか見えてなかったのである。野生馬の家畜化が進むにつれ、人間の介入により繁殖をコントロールし、産物（乳など）を利用出来るようになる事につれ馬の年齢性別による異った個体を表す語彙が発達したと考えられる。牧業が発達し家畜が多くなる事につれ識別し管理する必要性からズムをあらわす語彙が発生し発達して来たと思われる。私有財産が発生し自分の所有する馬を他人のそれと区別する為焼印が作られた。

馬に対する認識過程においてのより深い認識はシンジである。この為モンゴル人の馬に対する認識過程の中でズムは二次的である。モンゴル語の中ではもっとも重要な根本的な事が一番後に来てその前に修飾成分がつくという形にも反映されているのである。

さらにこの規則は駱駝や牛などのほかの家畜にも同様にあてはまるのである。

第四、十干、十二支など漢文化の影響から入来したものをモンゴル独特の仏教暦学による占いゾルハイなどと複雑に組みあわせる事によって人生の中でもっとも大事な儀式の時に騎乗する馬のズムを決める事から馬のズムはモンゴル人の精神世界を左右する大変重要な認識でもある事について論究した。

第五、モンゴル馬事文化は壮大なテーマで自分の手にあまるものがある。今回はズム問題を取りあげて本論の中心として組織的に論究して見た結果、いままで『元朝秘史』に関して世界的にも有名な学者の解説にも不適切な箇所があり、これに対して指摘する事が出来た。

例えば『元朝秘史』24に出現する「*orog siŋqula*」というズムをマンサン氏は「栗毛」あるいは「赤毛」と解釈し、村上正二氏は「背黒の茸毛」と解釈したのに対し筆者は「背に黒い線が通っているネズミ色の馬」であると特定した。

本研究にあげられるすべてのズムに写真をつける事が出来なかった事、又タマガに関しては地域分布特徴を示す詳細なデータを作成しなかった事など、今後の研究の中で本論の欠を改めて補おうと思う。